
Head or Tail

赦容

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Head or Tail

【Nコード】

N8599H

【作者名】

赦容

【あらすじ】

その《ゲーム》は「喪うまで逃がさない」と囁いた。その《遊び》は「闘うまで帰さない」と笑った。それは何時かの日に聞いた、御伽の国の住人が織成す「今日和」と「さようなら」が溢れるストーリー！

0：少年が見つけたフェアリーテイル

今日も彼女が来る。

『彼女』は薄い栗色の髪で瑠璃色の瞳をしている。

『彼女』とは最近、知り合った。最初の印象は強烈なもので今でもたまに『彼女』から逃げてしまいたくなる。

僕は弱い人間だから、『彼女』が秘める強い光に圧倒されてしまう。でも『彼女』とは離れられない。何故なら『彼女』は僕の、初めての友達で僕の『光』だからだ。そう僕の『光』なのだ。

その『彼女』の名はー。

「おはよう！今日も良い天気ね、テディ！」

「おはよう、エルシー」快活に挨拶を言った彼女はエルシー・リトル。あの『彼女』だ。

エルシーは毎日僕に会いに来てくれている。僕は病を抱えている。その病は死をもたらすものではないが、僕は死んだ方がマシだと思っていた。診断を下されたのは2歳の時だった。やがて定期的に来る眩暈、吐気、すぐに底を尽いてしまう己の体力、『可哀相』と冷

ややかに嗤う周りの視線に僕は誰かに庇護されなければならない存在なのだと、悟ったのは7歳を迎えたその日だった。僕の病のせいで両親に苦勞をいっばい掛けてしまった。僕を治療するには家から遠い病院に行かなければいけなかったし、高価な薬を買わなければならなかった。

僕の家はもともと裕福ではなかったので、さらに家計は苦しくなっていた。僕は負担しか掛けられない自分が惨めで、嫌いで、死のうとした事があった。結局両親に見つかって「もう、こんな馬鹿な事しないで！」「お前は私達の大切な子供なんだからな！」と泣きながら怒られた。彼らに抱き締められながら、心の中で何度も「ごめんね…」と送った。

そんな過去を思い出してる僕に彼女は微笑み掛けた。

「今日はあるが好きなアネモネを持ってきたの」

いつも彼女は花を持って来てくれて、花瓶に飾ってくれる。

「いつもありがとうね、エルシー」

僕がそう言うとな彼女は頭を撫でてくれた。僕は撫でってくれる白いこの手が大好きだ。まるで宝物のように扱ってくれて、とても幸せな気持ちになるのだ。両親の時と違って彼女の前では素直に受け止められるから不思議だ。

「ねえエルシー、お話、今日も聞かせて」

そして僕は彼女の手を頬を寄せながら強請るのだ。

「うん、じゃあ今日はある大きな七面鳥の話をしてあげる！」

彼女は楽しそうに笑い、話し始めた。最近、彼女が行く先々で聞きかじった童話や昔話を聞かせてくれるのだ。

彼女が来てくれるこの時だけは、閉鎖的な僕の部屋も幸福と彼女の声に包まれ、体が弛緩し鳥のように飛べる気がするのだ。
例えるなら、そう、黄金色の昼下がりのような。

1：犬とは狂っていない生き物だろう？

その日はミサに行く日だった。僕の家はカトリックで日曜日は必ず教会に行っている。

その時は珍しく僕の調子も良かったし、みんなで行くことになった。今考えると、もしかしたら神様が運命付けて下さったのかもしれない。『彼女』と出逢うことを。

ここはオクサンフォルダにある古い教会だ。ここの教会堂でミサが執り行われている。

キリエを唱えながらステンドグラスの窓を盗み見た。眩い光がそれに溶け込みながら、淡い色彩を引き立てている様は聖なる教会に相応しかった。これから行われる聖体拝領の味を思い出しながら、僕の思考は司教の言葉に取られていった。

教会の裏手に回ると、一面のクローバーの花畑がある。その可愛らしい花がある此処は、僕のお気に入りの場所だ。屈んでクローバーの緑を眺めていると、

「こんにちは」

その爽やかな声がした時、思わず飛び上がってしまった。僕以外に此処に来る人なんていないと思っていたのだ。

「ああ、驚かしてごめんなさい。私、もしかしてあなたも探してるんじゃないかと思って」

話しかけてきた彼女は僕が見た誰よりも美しかった。貧乏な僕が見てもオートクチュールだと判る服は、洗練されたレースと胸元のリボンが可愛い。淡い栗色の髪の毛と西洋人形のようなブルーの瞳はまるでビスク・ドールのようなようだ。そして何より僕にそう思わせ

た要因は彼女の肌の色。雪のような白い肌、なんて言葉で表現したくないが、まさしくそれなのだ。本当に色素が無いような肌だった。だんだん僕の頭の中で彼女はとんでもない御貴族様、と構成されてきた。そしてぐるぐる考えてた僕は、彼女にようやく返事をした。「あ、あの僕はただ見ていただけでして、そのっ何かお探しても？」彼女は言葉遣いが変わってしまった僕に少し笑って、答えてくれた。

「実はね、四葉のクローバーを探してたの」

四葉のクローバー？ああ見つけると幸せになれるというやつか。随分と可愛いものをお探しのようだ。

「良かったら、一緒に探しませんか？」と声を掛けるつもりだったのだが、彼女が「あっ！見つけた、見つけた！」と嬉しそうに言ったので必要が無くなってしまった。だから、

「良かったですね」

と代わりに言った。なんだか名残惜しかった。

「ええ！あつ、挨拶がまだだったね。私はエルシー、エルシー・リトル。よろしく！」

彼女はそう言っただけで軽やかに手を出してきた。僕はあまり人との接触はしたことが無いから、躊躇ってしまった。おどおどしながら、僕は握手した。僕のような者が彼女に触れてしまっただけで良いのだろうか。まだ会ったばかりなのに、そう思ってしまうのは彼女が完璧な人に見えるからだ。

「僕はデヴィ・L・ウォッチだよ」

僕が握手すると彼女は優しく、握り返してくれた。そして僕の指に何か付けてくれた。四葉のクローバーの指輪だ。

「これ、今日出会えた記念に。もし良かったら、友達、になってくれないかな？」

彼女がちよつと声を硬くして、僕に言ってきた。僕は本当に泣きそうだった。この指輪と彼女の申し出に。彼女が僕をじっと見つめる。何の曇りも、無い艶やかな瞳。僕はやっとの思いで言った。

「はいっ。僕も貴女と友達っに、なりたい、です！」

言った瞬間、彼女の目に焰が燃え燈る。ドラマでよく見る悪戯っぽい勝気な瞳になる。

「うん！私、初めての友達があんたで嬉しい！」

なんと彼女も初めてらしい。初めての友達が僕で申し訳なかったが、同時にとても嬉しかった。彼女は戯れて淑女のような仕草で恭しくお辞儀をした。

「それでは親愛なる紳士、テディ！また、絶対、会おうね。」

彼女がそう言ってくれた。次に会う時は彼女の、エルシーの友達の名に相応しくなっていたと思う。ぎこちなく胸に手を当てて、僕も別れの挨拶を。

「さようなら、マイ・レディ。会えるの、楽しみにしてるからね。」

ここで手の甲にキスが出来たら完璧だったのかもしれないけど、生憎僕にそんな勇氣は無かった。それでも彼女は白い頬を薔薇色に染めて笑ってくれた。

それから日曜日のミサは出来る限り行くようにした。だって彼女に会えるから。

でも僕の調子が悪くて出られない週が続いた。そしたら彼女が会いに、僕の家へ来てくれた。

「どうして僕の家が分かったの？」僕が尋ねると彼女が軽くウィンクをして「企業秘密だよ」と教えてくれなかった。

そして今の日常に至った。毎日彼女が来てくれるという。

彼女は僕と同じ年だから学校がある筈だ。ちなみに僕は行っていない。というか行けない。

それでも勉強はしている。ボロボロの教科書を何度も読み解いた。それに今では彼女は教えてもらっている。彼女は本当に博識な人でお作法から専門的なことまで豊富な知識を持っていた。だから余計に不思議だ。彼女曰く「色んな本を読み漁っていたから」だという。

そんな彼女と出会ってから随分時が経ったな、と思う。実質はたった2年だけだ。

2年、730日、17520時間。その間で僕らはお互い知り合えたと思う。まだまだ彼女については知らないことが多い。でも僕が彼女に寄り添うように、彼女もまた僕を抱き締めてくれる。今はそれで充分なのだ。

ハロウインの日、ビッグ・ベン、彼女の家、色んなことがあった。彼女が『光』だけで創られていないことも分かった。それでも彼女は僕の『光』だと言い続けよう。

ああ、はつきり言おう、僕はエルシーが好きなのだ！一目見たその時から！

この気持ちは、友情と言うには貪欲で、恋情では生生しすぎる。僕は唯、傍に居たいだけだ。

目を開けると、そこは彼女の家のキッチンだった。

そうだ、今日は調子が良かったから彼女の家に行くことになったのだ。

彼女は料理も上手で、今日はチェリーパイを作ってくれた。だが、彼女がいない。僕は不器用なので手伝いもできないから、椅子に座って彼女の料理する姿を見て居眠りをしてしまったのだが。ぐちゃ。

足元から嫌な音がした。材料である砂糖漬けのさくらんぼを踏んで

しまったようだ。

しゃがみ込んでもつたいないなあと見てると、後ろから足音。

振り向いたそこには、『狂人』、がいた。

「アロー、《白兔》」

いやりと弧を描く口元。

始まりは、《バンダースナッチ》だった

1：犬とは狂っていない生き物だろうか？（後書き）

オクスンフォルダⅡ 古英語でオックスフォード

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8599h/>

Head or Tail

2010年12月25日02時32分発行